

ニューギニア高地の体験

河 井 義 行

ニューギニア本島を鳥の形に喩えて、その尾の付け根の上(北側)に太平洋戦争中に魔の海峡と言われたビティアツ・ダンピール海峡がある。この海峡を挟んでウンボイ、ニューブリテン島に面してフォン半島がある。第二の都市ラエと美しい入江を持つマダン、この2つの都市を結んだその東側とも言えるが、この半島の先端近くにクロムウル山地と呼ばれる、標高 1,800 m から 3,200 m、面積約 7 万 ha の高地がある。西の海岸側は隆起サンゴ礁によるテラス状地形に、北側は急崖地に、南西側は切り立った溪谷に囲まれ、キノコを横に転がしたような地形である。乾期と雨期はあるが、ほとんど年間を通じて湿度が高くモスィ・フォレストと言われる地域で、繊維状のコケはマットとなり 2～3 cm の厚みで樹皮を囲み根元から枝にまで延び、クモの巣のように枝から垂れ下るものもある。コケの中にはデンドロビウムなどの気根性のランをはじめ寄生性の植物が混じる。地表では雨期には多湿のためヒルが発生する窪地もある。

国際協力事業団の委嘱調査員として昨年 3 月と 9 月の 2 回にわたり高地性の熱帯降雨林に踏み込む機会を得たが、当時を回想しながら森林の状況と周辺住民の生活を紹介する。

この高地は石灰岩が隆起した台地に火山灰が堆積した地形で、地質的には新生代第三紀と言われ比較的新しい年代のものである。北部の溶解されやすい石灰岩地域、南東部の砂岩の地域を除くと、全般的に溶解されにくい石灰岩でできているため、大きな河川はなく各地に無数のすり鉢状の凹地(ドリーネ)が形成されている。ドリーネに集まった雨水は空洞を作り地下水となって、この高地の周囲の山腹斜面から吹きだしている。このドリーネ状の地形をシンクホールと言う。林内での平均傾斜は 5～10°と緩やかで、山系には連続性が少なく各々が独立している所が多い。気候は 6 月から 9 月までが乾期、12 月から 3 月までが雨期、その中間は海岸地域では無風状態になるが、高地では逆に不安定な季節となる。雨期にはほとんどの日が午後は霧雨が 1～2 時間毎に繰り返す降り、乾期にも霧が覆れる日が多い。年間降雨量は 4,000 mm と推定されるが、降雨量そのものより晴天日が少ないのが特徴である。

森林は極盛相の様相で立木でも枯損木が多く、地上には枯れ朽ちた倒木が点在し、

KAWAI, Yoshiyuki: Experiences in the Highland of P. N. G.
谷藤機械工業(株)

上層木が倒れて林冠が切れ、直接日光が地表に届いている林地では一斉に稚樹が成長を始め、若い黄緑の葉が日光に反射してまぶしいぐらいに輝く。林内の主な樹種は標高 2,400m 以上でマキ科のフォンパインと呼ばれる *Dacrydium*, 2,400 m 以下では同じマキ科で樹形が野菜のセロリーに似ているセロリートップパインの *Phyllocladus* がある。広葉樹では美しいピンク色の木肌をしている所から名付けられたピンクバーチ (*Schizomeria*), 南洋ブナまたニューギニアブナと呼ばれる *Nothofagus* が分布している。また標高にはあまり関係なく、乾燥した尾根沿いに多い通称 ブラック・パインと呼ばれる *Podocarpus* や、ヒノキに似ている



Papuacedrus などがある。その他クスノキ 写真 1 コケに覆われた *Dacrydium* 科の *Cryptocarya*, *Dryadodaphne* (P. N. G. Sassafras), *Elaeocarpus* (Quandong), *Lithocarpus* (P. N. G. Oak), *Syzygium* (Water gum) などが主な樹種である。標高 1,600 m から 3,200 m と垂直分布も広範囲になるため樹種も多く、中には同じ属でも分布する標高によって種類の異なるもの、稚樹から成木になるに従い葉の形状を変えるものもあり、植物学上で学名が整理されていないものも多い。胸高直径 50 cm 以上を対象としてヘクタール当たりの蓄積が 100 m³ 以上ある地域は標高 2,400 m 以上では約 30%, 2,400 m 以下では 45% となり、高地へいく程針葉樹の比率は高くなるが、直径が細くなり蓄積量は少なくなっている。

この高地にはグラスランドと呼ばれる草地が谷間にあり、シダ類、イネ科の草類、高山性の小径木に覆われ、*Dicksonia* (ヘゴの類) が点在している。日の出前のグラスランドは、深い霧が漂い、立ち並ぶ無数のヘゴの木が人影のように見え隠れし、静寂の中に一幅の墨絵を描いたようである。標高の高い所では乾期でも土壌は極端に膨軟であり、地下 50 cm では地下水が浸み出し 30 分に 10 cm もの水が溜まる。地面は納屋のワラの上にいるように弾む。地中では有機物の分解が遅く未分解の草類の茎が土中に残り、土の層は 40~50 cm で繰り返す。草地の中には動物の排泄物が多数見られる。木登りカンガルー (現地ではクスクスと呼ぶ) は夜行性の動物で、日中は林内にいて夜間にグラスランドに出て草を食べる。極楽鳥や珍しい蝶を期待していたが、キシキンと羽音を立てて飛ぶ黒い鳥一羽、夕暮れのヒグラシゼミの声を聞いただけであった。

グラスランドの近くには狩猟の期間のみ使用する休憩場はあるが、この高地の中に人家はない。森林は住居用建築材料や炊事用の薪などを収集するために、また、グラスランドは、ワラビ、木登りカンガルー (いずれも小形の有袋動物) などを獲物とした狩猟の場に利用しているのみで、周辺集落の共有地となっている。この高地の周辺

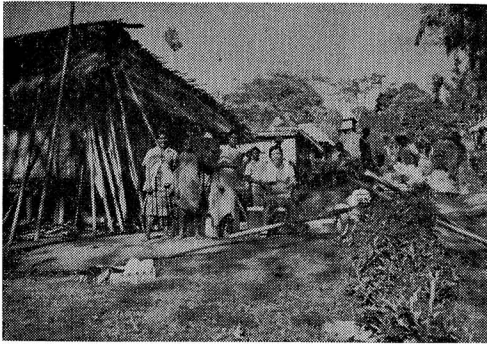


写真 2 台地上の民家（飲料水運搬用のタケ）

ほとんどが涸沢で生活用水は天水に頼っている。乾期には沢から往復 1 時間以上かけ水を運ばねばならないが、この様な立地条件を選んだ理由として海岸より蒸し暑さが無い事と、昔から彼らの生活に戦いが付き物であったが、台地の上の方が守りやすかった事からだと言われている。

各集落には 10~15 戸ぐらいの民家があり、台地の中央が道路になっていてその山側に畑がある。焼畑であるので地力が落ちると更に奥に入る。民家の外れは昔焼畑を行った所であろう、必らずススキの原になっている。畑ではタロ芋、さつま芋、トマト、キュウリ、キャベツ、イチゴなどを自家用に栽培している。換金作物としてコーヒも栽培しているが、このような台地では輸送手段が全くなく、けもの道のような急峻な道を肩に背負って海岸まで 10 km 以上の道程を 1 日がかりで運び、乾燥させたもので 1 kg が 200 円 ぐらいである。畑仕事、水汲み、家事は全て女の仕事で、戦いがなくなった現在男の仕事と言えば狩猟、開墾程度で、日中でもブラブラしている男性の姿が目につく。この辺の集落ですばらしい習慣は身寄りのない者は村の誰かが面倒みること、生活のレベルは低いが乞食のような人は見受けられない。老人も子供もはてはニワトリもブタも同じ生活という所である。住居は高床式で床は竹を組んだものでできているが、食事後の残飯は床から落とし、放し飼いの家畜に与えられる。家畜も床を通じて家族の一員となっている。

彼らは同郷の者をワントークと呼ぶが、もとは部落の共通語という意味で、ニューギニアの言語体系には 4 つのグループがあり、日常使用している部落内の言葉、これは国中で 750 種類以上あると言われているが、更に近辺部落間の共通語がある。これがワントークである。部族意識は非常に強く都会に出て成功した者にワントークの人間が集まった時、十分な世話を行わないと、村に帰った時に村八分にされるという。三番の言語がピジン語でインドネシア語やアフリカのスワヒリ語もピジン語と呼ばれるが、このメラネシアン・ピジン語は、ニューブリテン島のプランテーションに各地から集まった労働者の中で最初に使われ、全国に普及したと言われる。4 番目が英語で最近では学校での英語教育が徹底してきたので、部落語とワントークの比率が下がっているとの事である。

には大小 100 以上の集落があり、3 万人以上の人口があると言われている。周辺集落にも 2 種類あり、海岸近くの集落と標高 500~1,600 m の高地にある集落がある。高地の集落と言ってもペニスケースを付けた首狩り族と異なり、海岸に住む種族と風俗にそれ程の違いはない。彼らの集落は尾根筋の張り出した

た台地上にある。周辺の沢はほとん

この2回の調査では調査というよりも探検という面も多かった。グラスランドの中にテントを張りキャンプを行った事、高地では早朝あまりの寒さに目を覚ました事、早朝からテントをたたみ迎えのヘリコプターの音に耳を澄し、半日を過し、来ないと諦めまたテントを広げ、3日間青空を眺め続けた事、部落に泊り現地の人々の生活に接した事など数々の体験をしたが、ほとんど一年中雲の下で、人間を寄せつけまいとするように、地表を霧で覆っている標高3,000 m 近くにあるグラスランドをヘリコプターから眺めた時が一番印象的であった。ピジン語で“グッパラ”という言葉がある。“gut”, “gutpela”は英語でそれぞれ“good”, “very good”という意味で、彼らは会話の中で“それはいい!”, “それは素晴らしい”という意味に使う。厳しい自然の中にも陽気に生きる彼らの気持が良く表われている言葉だと思った。

新刊紹介

◎ギンネム—木材の生産と利用 (LEUCAENA—Wood Production and Use. Nitrogen Fixing Tree Assoc., Waimanalo, Hawaii, 50 pp. 1985, 10部以下 4.50 US\$, 10~24部 4 US\$, 25部以上 3.60 US\$)

1982年11月シンガポールで行われた集会で編成された J. L. BREWBAKER ら 7名の著者たちによって作成された実用マニュアルである。第1章 ギンネムとは、第2章 ギンネムの適地、第3章 変種とタネ、第4章 育苗法、第5章 地拵えと植栽、保育、第6章 下刈り、保護、第7章 収穫、第8章 木材の利用、第9章 その他の利用法という構成で、木材として利用する場合のギンネムの育て方を、多くの写真と図を使ってごく簡明に解説している。これまでに類似の解説書はあったが、これはより実用的に編集されている。なおこれまでややもすると過大宣伝の気味があった収穫量について、よい立地条件の所を選ばないと高い生長量は期待できないことを明示し、万能でないことを認めている。

(浅川 澄彦)